

モーツアルトの「幻想曲K.397」。出足から単なる音楽の進行に満足しない演奏家のキモチが強く伝ってくる。淀みない美しさより、どう感じどう表現するか。頼れるのは数多い前例より自分の羅針盤だけ。その冒険のプロセスを楽しんでいる。オリジナルな選択や表現できることに喜びを感じている。才気走った奇を衒つたものでなく、落ち着いた素直でノーマルな感情。繊細さ、美しさ、きれいさを見出せる女性らしい目、ピアニストの審美眼。思い入れタップリのベタベタチックや無闇矢鱈のスマートの幻想的な演出はナシ。純粋無垢で澄み切ったモーツアルト・トーンは聞こえない。過剰に作曲家を意識して、コウあらねばというモノにこだわらぬ。かといって気負いはない、静かな闘志、強い意志。頭の中でイメージされている不思議なモーツアルト。非人間的でなく血が流れている音楽。突然の装飾音にビックリ。

「ワルトシュタイン」。少しユックリメのテンポ。速く処理しなくてはという気ぜわしさからチャカチャカ慌てることはしない。細部を丁寧に丹念にほぐして光をあてる。正統的アプローチ。時折見せる異彩な光の輝き、そのキレイサにハッとする。気に入ったところをピックアップして、魔法の杖を振って、もう一度美しく花を咲かせている様。感覚的だがコントロール下の没頭。オドロオドロシイ魔法使いのオバアサンでなく、落ち着いた穏やかな上品さ。分析作業の怜俐さはなく、知的解明の面白味を楽しんでいる。2楽章、止まるようなストップモーション。グロテスクなズームアップやエグリ出しでなく、セーフモードのエレガントな緊張。音楽が止まった様な瞬間も安定感。不安はない。3楽章、ドラマチックな中でも自分が感じたものを丁寧に表現。ピアニストが今表現できる音楽、今日この時間にしか存在しない。ほぼ思い通りの演奏、満足に近いものと思う。引き込まれてイイ時間を過ごさせてもらった気がした。感謝。

ブラームスの「6つの小品 Op.118」。この作曲家の後期の小品には、晩年ということを意識し過ぎて演奏家とギャップを感じることがよくある。私の中では枯れた瘦身の老人、寂寥感あふれる冬の公園のイメージ。自分の境遇を受け入れ、そこでプラス志向で生きる強さを、思い浮かべていた。ピアニストは私より想像力が逞しいのか、单一化しないでいろんな人格の混在を表現している。2曲目、ゆっくりとメンメン。寂しさ悲しみというより、今を肯定する意志の強さを意識する。4曲目、5曲目、セピア色のくすみがかったボアーツとしたノスタルジア。こんなコトがあったんだヨ、ほろ苦い思い出。ハッキリ言葉に出せない口ごもり。6曲目のドラマチックな感情投入、寂しさからの叫びナノカ。若い自分への回帰じゃナイノカ。

ショパンの「スケルツォ4番」。正直言って、最近ショパンにはあまり興味は感じていなかつた。ロマンチックとかキラビヤカサに、鈍感になってしまっていたのかも知れない。流しモードの準備をしていたが、今日の演奏を聴いて、明るさ、爽やかさ、健康的なものを感じて新鮮に感

じた。この曲をミケランジェリさんで聴いた時のワクワクした気持ちに戻ったことを嬉しく思った。
オーソドックスな取り組み。のびやかでハツラツしたもの。病的なものは感じない。細部へのコダワリ、予想もしないメロディーの浮き上がりにエエッと驚き、ニッコリする。

アンコールの「トルコ行進曲」。4年前の演奏を思い出し嬉しく思う。その時の感想を再掲する。「私のイメージとしては、余分な音を排除し、最小限の音だけを浮かび上がらせるゼイ肉のない音楽である。研ぎ澄まされた感覚勝負になるのか。すごく軽やかに弾いている。中間部のメロディーでは、こんなに早く弾かなくともいいのに思うほど駆け足である。サビの部分ではエキセントリックに演奏することもナイ。また、悪魔のササヤキが命じた不協和音を強調することもナイ。あくまでも真摯で素直である。それも一つのアプローチ。最後近く、クライマックス部分のウラのメロディーをすごくエレガントでキレイに響かせた。今まで誰からも聴いたことがない、とても素敵な瞬間だった。」

後半最初のバッハ。最初のハ長調でなく嬰へ短調。プレリュード、唐突に疾風、駆け足で通り抜け、アタマは否応なしに休憩モードから演奏会モードへ。フーガ、アタマだけでなくココロもそなならんとしての更なるマインド・コントロール。アンコール2曲目のショパンの「ノックターン20番」。「戦場のピアニスト」を意識？全般的に素適なもの、でもクライマックスの結論を少し急ぎ過ぎた気がした。ドウシテという理由が少し淡白でセッカチに思える。

このピアニストを聴くと、「どう音楽を考えます。」「どう感じます。」ということに真正面から向き合っている演奏家に成長していると思っている。目指すは技術偏重のピアニストと反対の極。ウワベだけの音楽の流れを重視して音楽を盛り上げ整えようとするウデップシ自慢でなく、どういうキモチをどう表現しようか、クレバーに思考できる素晴らしい音楽性と才能を感じる。技術より感性を大事にしている。誠心誠意、優等生の模範解答で大きな冒険はないが、細部はまさにオリジナルな解釈と表現の宝庫。ハッとする音の響きや連なりがゴマンとある。その度にピアニストの自信にみちたホホエミを感じ取る。でも、控え目に優しく観客に問い合わせるだけ。ここ2、3回の演奏会では、ピアニストの才能が空回りしているのを感じていた。伴奏等で自分に専念できず自分主張できぬモドカシサやアキラメを感じていた。今日、十分に考えられた落ち着きのある音楽を聴いて、音楽をノリのヨサで片付ける体育会系リラクゼーションではなく、より上質な時間過ごすことができたことに感謝する。音楽の原点に立ち戻れたことを嬉しく思う。（

2003.6.15）

モーツアルト：幻想曲 ニ短調 K.397

ベートーベン：ピアソナタ 21番 ハ長調 Op.53「ワルトシュタイン」

J.S.バッハ：平均律クラヴィーア集から プレリュードとフーガ 婴へ短調 BWV859

プラームス：6つの小品 Op.118

ショパン：スケルツオ 2番 変ロ短調 Op.31

(アンコール)

モーツアルト：トルコ行進曲(ピアノソナタ 11番 イ長調 K.331 第3楽章)

ショパン：ノックターン 20番 嬰ハ短調 Op. poth
